

指定討論者より

関口氏：(保育現場の立場から) 概念には、1つは具体的事物に即したもので、他方は目に見えない抽象的なものの2つあると思う。子どもに、物とふれあう機会や体験を多く与える際、子どもの興味、関心という問題が付きまとう。更に、子どもが、ものからうける個人的、日常的な概念をどのように科学的な概念へと高めるかが、大きな問題となってくる。しかし時として現場の指導者そのものに科学的な概念に近づく手だてが明確でないことが多い。また、目に見えない概念の場合は、具体的な経験というのが限られてしまうという問題が出てくる。そのへんを、どう指導してゆけばよいか？

福沢氏：◎今までの話は思考研究にウェイトがかかりすぎていた。そこで、私は、昭和20年来の言語生活主義の言語教育に対して、言語のいわゆる基本である語彙教育、とか文法教育を見直す必要があると提案し

たい。

◎一般意味論で言う affective connotation (affective な意味) は概念形成の中でどのように位置づけられているのか。

◎「動物」は、子どもにとって、「けもの」を意味する。動物という上位概念が動物の中の「けもの」へまでおりて来ているのである。これは言語が思考をコントロールしている例だと言える。このような面は内容語(コンテンツワード)を考えてゆくときに考慮されねばならない。

◎それから、概念形成ということを考えるとき、機能語の問題をどう取り扱うのか。

千原氏：子どもの概念研究の方法論は、従来、言語的な実験を中心として来たが、非言語的な方法(たとえば、心搏数の変化など)だけで、概念発達を取り出す方法はないのであろうか？。

自主シンポジウム III：初期言語発達の現状と課題

オーガナイザー

秦野悦子(お茶の水女子大学)

提案者 岩立志津夫(東京都立大学)

綿巻徹(九州大学)

田中みどり(お茶の水女子大学)

指定討論者

芳賀純(筑波大学)

言語発達過程のうち、特に初期の問題に焦点をあて、子どもの言語行動の基底となるようなより妥当的枠組みを確定する試みとして、提案者3名がそれぞれの立場からの研究報告を行った。このシンポジウムが初期言語発達研究に取り組む研究者達のひとつの出発点となり、今後の研究の方向を定めたり、問題を広げたりする礎となれば幸いであると考えた。

そのために、シンポジウムに割りあてられた時間では言い尽くせないような各自の詳細な内容を、あらかじめ40頁にわたる資料として作成し、会場で配布した。

秦野悦子：わが国の初期言語発達研究の流れ

1. 問題提起

1-1. 乳児期段階からの子どもの行動をいかに観察するか。すなわち、その期の子ども達にとっての主体

的行動をとらえるための観察の視点をどこに置くか。また、自然観察ではとらえきれない行動を、統制場面でどのように抽出していくか。

1-2. 言語獲得を全行動発達のひとつの表現とみるならば、それは長期発達変化の中で縦断的な生態学的観察が必要となる。そこで得られた結果がどこまで一般化できるのか。生じたひとつの行動が、その後のどんな行動に関連づけられるのか。

1-3. 獲得された言語機能が、自己(伝達)表現手段としていかに発達していくか。特に初期の言語習得と言語使用のズレの問題は、「能動的発話研究と受動的理理解研究をどのように扱うのか」という問題でもある。

1-4. 形態的には同じであっても、子どもの発話した音声機能がどのように分化していくのかを探る事は重要である。

1-5. 有意味語出現以前の表現行動(身振りと言声)のうちで、何が一定の言語表現へとつながる固有の意味をもって分化するのか。また、音声言語として独立に使用されるのはどんな種類のものか。身振りから音声へと移行する基礎となる構造を探りたい。

実際に子ども自身が、行動次元と言語次元のカテゴリーをどう対応させているのか。更には、身振り表現の限界および言語出現が、それから後の子どものコミュニケーション発達にどんな影響を与えていくの

か。

1-6. 「大人(主に養育者)と子どもとのきわめて密接な情緒的な結びつきを基礎として、言葉は学習される。」と一般に言われている。言語能力がその基礎を初期相互交渉に依存しているとすれば、一語発話以前の母子の前言語的伝達様式の研究が、もっと実証的な形で行われねばならない。

1-7. 言語を支える認知機能は何か。

1-8. 言語獲得は、認知的社会情緒的発達に何をもたらすのか。

2. 日本における言語発達研究の流れ

2-1. 発声行動の発達を軸に、乳幼児がどのように言語機能を形成していくのか、また養育者や外界との拘りにより言語機能形成過程がどのように促進したり、妨げられたりするのか、という音声発達研究の紹介を行った。

2-2. Chomskyの影響を受けた統語発達研究の紹介を行った。この立場からの研究は、二語発話期以降に開始され、子どもの文法の獲得過程を主に分布分析により行い、発達心理言語学という新分野を開拓した。

2-3. 言語行動をコントロールする環境や刺激に注目し、特に養育者の働きかけに対する子どもの対応、子どもの働きかけに対する養育者の対応などから、言葉の学習を環境内で明らかにしていく立場、つまり認知理論に基づく言語発達研究の紹介を行った。

2-4. 語彙の習得および発達についての研究の紹介を行った。それは、①子どもと養育者の情動的関わり、②感覚運動的スキーマの分化・協応としての外界認知、③発声行動、の3つが相互関連しあいながら発達し、1才中頃になってそれらの統合により言語機能が形成し始めるといわれている。

2-5. 幼児の発話を収録し、各品詞内容とその年齢的出現の様子を明らかにする文法発達研究と、一方では、生成文法が提起する言語理論により検証された幼児の文法発達研究の紹介を行った。

2-6. 資料的研究として報告されたいくつかの研究の紹介を行った。

岩立志津夫：発話文法は可能か？

ここ3年程の、発話に関する縦断的研究の経験をもとにして、2つの提案をする。

〔第1の提案〕

最近10年程の言語発達研究の大きな特徴の1つは、生成文法的な研究が生じたことである。この種の研究に対する心理学者達の評価は種々である。村田孝次('77)が、この種の研究を「心理学離れ」と呼び、認

知的・生態学的研究こそが心理学的研究の本来の姿と述べる一方で、高田洋一郎('77)は、生成文法的研究にも、あいさつ言語等の所謂心理学的研究にも、それぞれ長短があり、両者が助け合う姿こそこれからの言語研究の姿であると述べている。岩立の考えは、高田のそれに近い。すなわち、心理学にとって、所謂心理学的な言語発達研究が必要であると同時に、言語学からきた心理学の研究も必要で、ここで重要なのは、両者が批判しあいながらも協力しあって行く事である。

〔第2の提案〕

生成文法的研究の1例として、発話文法の作成がある。ここで言う〈文法〉は、〈言語〉と深く結びつけて定義される。チョムスキー('57)によれば、言語とは文法を元とする1つの集合で、ある言語の文法とは、その言語=集合に含まれる文法的連鎖を全て生成するが、その言語=集合に含まれない非文法的連鎖は生成しない装置を意味する。

このような文法観から作成される文法は、いろいろ考えられ、チョムスキーのそれに近いものから遠いものまである。このこと具体例として、一児の2:1~2:8までの発話資料の中から2つの動詞(「たべる」と「かく」)に関する発話を取り出して、これに対する4つの文法(「単純文法」「軸文法」「格関係基軸文法」「心理過程中心文法」)の作成を試みる。そして、この4つの文法を、チョムスキーの言う妥当性を基準にして比較した結果、この限られた資料に関する限り、「心理過程中心文法」がもっとも実際に適合するらしいことが分る。記述の点などに問題を残すが、この文法には次の3つの特徴がある。

第1の特徴は、発話の生成という現象を、多層(最低、表増と深層の2つ)構造からとらえる点である。

第2の特徴は、これらの各層が別々の発達をとげると考える点である。

第3の特徴は、言語=集合の指定、すなわち、文法的に正しい文と正しくない文の決定が、各層の持つ構造の組合せを使うことで可能である点である。

綿巻 徹：一語文から二語文へ

〔問題〕 一語文期、二語文期の言語行為の機能の分類、それらと非言語的状況との関連、単一語による言語的発話が後の語結合による発話へと洗練されていく過程を分析する。動詞を述語として含む二語文について、個々の動詞に結びつく単語を関係概念を用いて分析する。

〔方法〕 対象児：F子。1才8, 1才9, 1才10, 2才

0の各月8時間の発話資料。

〔結果と考察〕 1. 言語行為の機能には、呼びかけ、指示・命名、記述的、遂行的、要求、質問、否定などがあった。

2. 一定の行為や非言語的状況と結びついた習慣化された言語行為がみられ、これは数か月間にわたって維持された。習慣化された言語行為の確立と反覆の過程の中で、新たな意味機能の出現とそれを出現するための言語形式の洗練がみられた。この言語習慣の確立が、語結合による言語行為の出現の条件だと考えられる。

3. 各動詞でとの関係概念の増加とその発生順序は(表2)に示す。

一語文期をもっと長期にわたって観察研究する必要がある。一語文期の研究に対して次のように考える。一語文は言語外の具体的状況、動作と密接に結びつくことによって伝達手段となる。一語文は子どもの伝達しようとする事柄、内容の一部だけが言語化されたものである。そしてこれらの一語文は子どもの周囲で生起し、過ぎ去っていく事象に対する子どもの判断様式と外界に対する経験を組織する子どもの認知様式の変

化を反映する。それならば、子どもはどのような意味機能を持つ要素を単一語として言語化するのか、これは後の語結合による発話といかに関連しているのか、これをもって組織的、数量的に明らかにする必要がある。

田中みどり：幼児における単文の構造の発達

日本語を母国語として獲得している幼児が見たり聞いたりしたことを表現する平叙・肯定・能動形の単文の構造の発達の順序性に関して、仮説を提出し、これを検証する実験を報告する。

仮説の骨子は下記の通りである。単文の構造の発達は、他の条件が同じなら、(a) 1単文内の文節数と(b) 述部の動詞の統合的機能によって記述できる。(動詞の機能は、結合価を指標として、結合価1(ほぼ従来の自動詞に相当)、結合価2(同じく単一の目的語をもつ他動詞に相当)、結合価3(同じく2つの目的語をもつ他動詞に相当)の3種である。幼児の単文の処理能力は、1単文内の文節を単位として一定のスパンがあり、これは短期記憶範囲と相即不離に関わって年齢と共に増大する。幼児の言語獲得過程では、スパンと動詞の結合価との間に、前者の増大に伴ない後者も増加するという関係があるだろう。

結合価1・2・3の動詞を述部とし、各動詞が必要とする名詞句を含んだ整った文は、それぞれスパン2・3・4の段階で最高水準の文として習得されるだろう。動詞と必要な名詞句から成る整った文が出現するとされる段階よりスパンが小さな段階では、整った文の一部が先駆形態として観察されるだろう。一旦整った文が習得されれば、名詞に修飾語が加わったり位置のような状況成分が加わったりするのは比較的速やかだろう。

実験1により、単文処理におけるスパンの仮説は確認された。幼児に直後再生可能な1文中の文節数の最大値をもって単文の認知範囲と操作的に定義すると、この値は年齢と共に増加し、数の短期記憶範囲と事実上等しいことが見出された。

実験2では、文節数が同じでも文構造の差異により直後再生結果に差があることが明らかとなった。即ち、動作者+位置+動詞(結合価1)の構造をもつ3文節文の方が、動作者+受動者+動詞(結合価2)の構造をもつ3文節文よりも4才児で有意に再生率が高く、動作者+受益者+受動者+動詞(結合価3)の構造をもつ4文節文の方が受身の4文節文よりも5才児で有意に再生率が高いことが示された。従って、単文の処理範囲だけでなく、述部の構造を考慮する必要がある。

実験3では、結合価1~3の動詞を述部とする文の発

表1

動 詞	関係概念の数				関係概念の出現の順位
	1:08	1:09	1:10	2:0	
終わった		1	1	2	変化主>陳副
済んだ		1	1		変化主>状態のもち主
落ちた		1	3	1	変化主>時, 様態
まわっている				2	変化主, 様態
出る(無意志)	1	1	1	2	変化主>場所
出る(意 志)				2	行為者, 目標(場対)
行く	3	2	3	4	行為者, 目標(目的地), 手段>仲間>目的
帰る		1	1	2	行為者>陳副
来る				2	行為者, 時
はいる	2				行為者, 目標(場対)
乗る		1	1	2	目標(接触)>行為者
食べる			1	2	対象>行為者
作る				4	行為者, 対象, 材料, 陳副
出す			1	2	対象>行為者
入れる				3	行為者, 対象, 副詞(また)
取る		1	3	2	対象>行為者, 目標(受益者)
持って来る			1	2	対象>行為
要る	1	2	4	3	対象>主体(心的過程)>数量, 陳副
もらう			3		主体(受益者), 対象, 源泉(授与者)

話と単文の認知範囲との関係が検討され、結合価3の動詞を述語とする文構造以外については仮説が確認された。即ち、動作者—受益者—受動者—動詞の文構造のスパン4の段階で最高次の文であると仮定されたが、スパン3の段階で既に現れることがわかった。これは実験3で用いられた結合価3の動詞「あげる」が要求の表現と結びついて日常頻用される為特に出現が早いと考えられ、結合価3の動詞の例の多い別の実験ではこの解釈が支持されたと報告された。

これらの実験によって仮説は確認された。

芳賀 純：指定討論

最近の文法発達研究の中から、特に格概念——主格（動作者）、目的格、受益者格等いくつかのものがある——を考える時、意味をより重視する生成意味論的立場から文法の基本概念を考慮する研究が行われているといえる。日本語でいえば格助詞で示されるものであり、この格概念の投入によって初期の生成文法は、生成意味論へ発展したと言える。

格を最終的にいくつに定めるか、それぞれの格にどんな役割を与えるかについて、まだ諸説定まらずであるが、いくつかの基本的なものは一応の一致がみられる。また格を取り上げる際、必ず意味論的要素が入り、その概念を格と呼ぶか、機能と呼ぶかは定まっていない。

3人の提案者は、このように生成意味論的に捕えた文法概念を、日本語で研究を行う際に最も適当と思われるものを選び取って、自説の中に組み入れる方法をとっている。

実際の研究で格だけを意識するならば、心理学離れた言語学的立場となるので、その際、格を中心とした心理学的巨視的研究が必要である。

Darwin は文法と心理学の関係を次のようにみなした。「言語学者が言語学法則として提出している法則は、心理学者の側からみると検証すべき仮説とされる。両者の共通領域において、心理学研究は言語学の指摘する重要な仮説概念と無関係に行ってはならない。」上述の如く、今後は言語学の問題と心理学の接点を求めざるを得ない。さらに、認知論的立場から文法の主要概念を取り出して、研究を進めていくべきである。

討 論：

久野久子（大手前高校）：「幼児期における初期の言語獲得と発達」の中で、Chomsky の言うような生得能力をどのように解釈するか。

答（芳賀）：受胎後3か月より始まる聴覚諸器官の発

達に伴って、胎児に言語資料がinputされている。そのinputされた言語資料が人間特有の言語中枢を刺激してChomskyの言うところの生得能力が開発され高められて、出産後の言語学習を助けると考える。

佐藤 功（金沢大学）：心理過程中心文法に関して、深層構造の発達の側面の具体的説明を求める。又、深層構造の意味関係の認定方法について、発話状況を考慮する必要はないか。

答（岩立）：深層構造の発達とは、結局は論理要素の増加の事で、綿巻の言う関係概念の増加と現象的に同じ事を指す。両者の相違は、綿巻が動詞間に共通な特定の関係概念をあらかじめ仮定するのに対し、岩立は始めのうちは論理要素が動詞毎に独立して役割を荷うと考える。次に、論理要素の数の認定は、できる限り、発話の分布分析や、フィルモアの「一文一格原理」を使用しているが、各要素の意味の認定にはどうしても発話状況を考慮せざるを得ない。が、これには主観が入り易いのでこの点に関してもっと検討を加えたい。

吉田章宏（東京大学）：言語学的文法に対しては2つの立場がある。文法を、心理過程の一表現とする立場と心理過程とは無関係な形式的規則とする立場である。岩立の文法は前者の試みと考えられるが、その場合、① 幼児における言語=集合はいかにして確定されるのか、② 文法が心理過程に対応すると考える根拠は何か、③ この文法は上記の諸立場といかなる関係にあるのか。

答（岩立）：① 発話過程は雑多なものから特定のものがフィルターにより選出される事に似ている。故にフィルター（各層の構造）を規定する事で言語=集合の確定ができる。② 実際の発話過程や発達をかなり適切に説明できるという点が挙げられる。さらにこの点に関して検討したい。③ できる限り資料中心に研究を進める事で形式的規則に走らぬよう努めている。今後記述法の改善等により、少しでも心理過程に近い文法を作成したい。

自分達が平素頭の中で考えている間は、浮動していたり、比較的曖昧であった事柄が、シンポジウムの場に提出する事で、より明確になった。その上、多くの人達の批判検討を受けるが故に、研究を進めていく上での良い刺激を得たことを嬉しく思う。

だいぶ時間を超過したにも拘らず、フロアとの討論に火がつかかかった所で終わってしまった。シンポジウムで得た様々な貴重な体験を今後の研究に生かし、広い発達の視野内で言語発達研究のより根本的問題を

深く掘り下げていくつもりである。更には、この種の言語発達関係のシンポジウムの継続的積み重ねと同時

に、自主的な研究交流の会合を持つ機会が得られる事を望みたい。

自主シンポジウム IV：大学入試についての教育心理学的検討

司会者 佃 範 夫（香川大学）
提案者 肥田野 直（東京大学）
辰野 千 寿（筑波大学）
原 一 雄（国際基督教大学）

国立大学協会が検討をすすめてきた「共通一次試験」が、昭和54年度から実施されることになり、「入試センター」で共通問題をつくり、難問奇問を排除し、高校での教育成果をより正しく評価しようとしている。

この共通一次試験に多くの期待がかけられているが、同時に、それぞれの大学・学部が独自に行う第二次試験にも大きな変革が予想されている。

国立大学協会が示しているガイドラインによると、第一次試験との重複は極力さけ、学力試験以外の口答試問、面接、実技検査なども考慮して、各大学が独自の方法を工夫することになっている。

この一次と二次の組合せを、各大学・学部が独自に考えて大学入試を改善しようとしているが、果たしてガイドラインに示された基本方針のもとに、それぞれの大学・学部が許された選抜の自由を最大限に行使して、期待される改革が可能であろうか。

大学入試をめぐる問題が、教育界にとどまらず、国民的課題になっているとき、大学入試についての検討を教育心理学的立場から試みることにした。

提案1. 肥田野 直：高校一大学生活と入学試験

大学入試を① 入学志望者の立場、② 大学の立場、③ 高校の立場の3点から考察し、主として入学志望者の立場と大学の立場から次のように述べられた。

① 入学志望者の立場

社会人としての自己実現をはかるために、どのような分野に進むかという進路選択は青年期の重要な発達課題である。自己の適性の自覚と、それにふさわしい路線を選択し、それへの準備をすることは、高校生活の重要な目的の1つであろう。しかし、それを困難にしている問題が現状には存在する。例えば、

- (1) 職業的未成熟
- (2) 自己の適性を知る機会の不足
- (3) 進路選択に必要な情報の欠如

(4) 試験という不確定性を伴う事態に対する不安

(5) いわゆる受験体制教育の影響

などである。

② 大学の立場

大学の立場からは次のような問題が指摘される。

(1) 大学入試のむだをなくすという意味では、統一選抜方式（共通一次試験）がよいが、大学の独自性・特殊性を主張すると受験準備（二次試験）の負担が増大する等、大学の独自性と大学間連携の問題がある。

(2) 大学の求める学生像と選抜方法との隔り

(3) 調査書の活用と推薦制度の拡充の問題

(4) 大学と高校の連携の不足

提案2. 辰野千寿：入学者選抜の方法について

学力試験による選抜と、推薦入学の二本立で行われている筑波大学の入学者選抜について述べられた。特に推薦入学について、何故推薦入学制度をとり入れたか、推薦入学の目的、選考方法等について具体的に述べられ、教育心理学的問題として、推薦書の信頼性、妥当性の問題が指摘された。また入学後の学習状態についても言及された。ついで、推薦入学の第二次選考と、学力試験による選抜の場合の第二次学力検査（一部）での小論文や面接について説明があり、そのねらいや意味づけ、客観性の問題等が指摘された。

提案3. 原 一雄：入学者選抜の原理と実際

入学者選抜に関する諸問題が、国際基督教大学でのとりくみをもとに指摘された。

(1) 選抜方法の種類とその背景について

(2) 選抜方法の良否を決める評価基準について

(3) 国際基督教大学における入試の方法について、具体的に述べられた。特に入試に関する悩みとして、海外からの応募者の問題、入試資料を入学後のガイダンスにいかに関与利用するかの問題、日本人学生と外国人学生の格差の問題等が指摘された。これらの問題をふまえた大学教育のあり方について教育心理学的考察の必要性が強調された。

以上の提案に基づき、フロアーから松本金寿（立正大学）、星野 命（国際基督教大学）、三井大相（東京

social conceptualization. It appears on the phenomenon of word generalization in early childhood. In case of the autistic children, they are deficient in their social and emotional factors. So, though they have their autogenetic concepts, they can't reconstruct it into our conceptual system. It is thought to be an important first step for them to establish the object-relation as libido-object. Through its relation, their concepts gradually become social and formative.

Independent Symposium III

CURRENT TRENDS IN DEVELOPMENTAL PSYCHOLINGUISTICS

- Organizer : Etsuko Hatano (Ochanomizu University)
Speakers : Shizuo Iwatate (Tokyo Metropolitan University)
 Tohru Watamaki (Kyushu University)
 Midori Tanaka (Ochanomizu University)
Discussant : Jun Haga (Tsukuba University)

This symposium was to present and discuss current studies in developmental psycholinguistics in Japan.

The organizer first gave a review of the Japanese psychological studies in language development and pointed out several problems for further research.

After illustrating his viewpoint affected by Chomsky's, Iwatate discussed Chomsky's adequacies, the 4 generative grammars with reference to one Japanese boy's utterances, and concluded that his psycho-process grammar is the most adequate so far as the present analysis is concerned. In the psycho-process grammar, the plural strata developing independently are supposed, and the combination of the restrictions of each stratum determines whether it is possible or not to generate a specific utterance.

Watamaki classified a speech into functional categories: naming, vocative, performative, descriptive, and so on. Illustrating the developmental process from one-word to combinational sentences, he found as follows: (1) Similar non-linguistic contexts and child's activities evoke speech with particular semantic function. (2) In the course of establishment of speech habit and repetition of speech, the form of expression was evolved. He asserted that this establishment of speech habit was an essential prerequisite for emergence of combinational speech.

Tanaka dealt with the development of the simple-sentence structure in Japanese children. The hypothesis was that the development could be described, other things being equal, in terms of the sentence length (the number of phrases within a sentence) and the valence of the predicate verb. This was verified by three experiments.

Haga commented on the recent increase of studies based on generative semantics or case grammar and emphasized the importance of approach to language acquisition dealing with

the field common to psychology and linguistics from a psychological viewpoint.

Some useful ideas from the participants followed the speeches.

It is expected that this symposium would give further impetus to researches in Japanese.

Independent Symposium IV

EDUCATIONAL PSYCHOLOGICAL APPROACH TO THE UNIVERSITY ENTRANCE EXAMINATION

Chairman: Norio Tsukuda (Kagawa University)

Symposists: Tadashi Hidano (Tokyo University)

Chitoshi Tatsuno (Tsukuba University)

Kazuo Hara (International Christian University)

Hidano: "Highschool-University Life and Entrance Examination"

Entrance examination system can be examined from the viewpoints of applicants, universities and highschools. He examined it mainly from the former two points.

Tatsuno: "On the methods of selecting applicants"

He explained the selecting methods of Tsukuba University, which selects applicants by the examinations in the academic subjects and the recommendation of highschools. He mentioned the aims and methods of the recommendation system, and also referred, as educational psychological problems, to the validity and reliability of the system and the applicants' achievement after their entrance to university. Finally he referred to the "short thesis" and the interview test and explained their aims, significance and objectivity.

Hara: "The principle and present situation of the selection of the applicants"

He referred to 1) the kinds of selecting methods and their background and 2) the standard of evaluating the selecting methods, and explained the entrance examination system of International Christian University. He emphasized the necessity of the educational psychological approach to education in universities, while mentioning the problems raised by giving the entrance examination.

After the reports of three symposists, the methods of selecting applicants became the topic of a talk, and then three points 1) the recommendation system, 2) "Kyotsu-ichiji-test" (the test on academic subjects given to all university applicants) 3) the relationship between "Kyotsu-ichiji" and "Niji-test" (the test given by each university) were discussed:

1) The validity, reliability and objectivity of the recommendation system were discussed and it was admitted that these points require further examination. 2) Merits and demerits of "Kyotsu-ichiji" were examined, and it was suggested that they should be evaluated by the follow-up study of the "No-ken" (the test of the academic subjects given by the Ministry of Education) and the "Shin-teki" (the aptitude test of further education). 3) As a final judgement on "Kyotsu-ichiji" had not been obtained, "Niji-test" was dealt with differently from university to university. Therefore, its evaluation and the combination of the two tests